

---

IS    **インフィニット・ストラトス**    ——別世界から来る者たち——

ゆー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS      インフィニット・ストラトス      —— 別世界から来る者たち——

### 【Nコード】

N3351S

### 【作者名】

ゆー

### 【あらすじ】

ISの世界に来てしまった早乙女アルト、キラ・ヤマト、刹那・F・セイエイ、ルルーシュ・ランペルージ。この四人は、“束”という人物に出会い、IS学園に通うことになる。そして、別世界の人間である筈の四人が、どうしてもかIS学園に集まる。そこで、数々の思惑が交差していくのだった……。これは、ISに他作品を加えたクロスオーバーです。作者が未熟ですが、どうか宜しく願います！後、感想などを頂ければ幸いです。

## プロローグ（前書き）

プロローグとなっております。

この話は、内容がすごく短いです。すみません；

すぐに次話を投稿しまう。

## ブローグ

「俺の妹から離れる！」

早乙女アルトは、ブレラ・スターンが駆るVF-27ルシファーの銃弾を回避しながらコクピット内で叫ぶ。

「妹だと!？」

そして、ブレラの射撃がアルトのVF-171EXに被弾する。

被弾したアルトを、克蘭・克蘭の搭乗機である真紅のクアドラン・レアが援護に入る。

だが、その克蘭の援護も、ブレラの圧倒的な力の前では無力だった。克蘭の攻撃を回避し、ブレラは精密無比な射撃で克蘭の機体をも被弾させる。

「克蘭っ！」

そこへ被弾した克蘭を庇う様に、アルトが場とファイターモードで前へ出る。

「——散れ！銀河の果てへ！」

だが前へ出たアルトのVF-171EXを、ブレラの射撃が射抜いた。

その、瞬間——アルトは爆発とは違ったものに包まれた。

＋＋＋

「アンタは俺が討つんだ！ 今日、ここで！」

キラの乗るフリーダムは、怒濤と続くインパルスの攻撃を受けていた。

さらにインパルスはこちらの狙いを予測し、回避してくる。、キラは違和感を感じていた。

「くっ！ ……アークエンジェルが！」

だがキラは目の前の敵よりも、アークエンジェルが気がかりであった。

ザフトの攻撃を受け続けている母艦が心配で、インパルスの相手に集中できない。

「逃がすか！」

アークエンジェルを援護しに行こうとしても、敵のインパルスがそれを許してくれない。

そして、凄まじい敵の攻撃に、キラのフリーダムはどんどんダメージを負っていく。

「なっ！？」

キラは、敵艦の主砲を受けたアークエンジェルの方に、意識が傾いた。

……その瞬間、インパルスが迫ってきていた。

「てやあああああ！」

咄嗟にキラは盾を構える。だが、その盾をインパルスのエクスカリバーが貫いた。

しかし次の瞬間起きたのは、爆発ではなく、光が包み込んだ――

＋＋＋

「ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ――未来を切り開く！」

刹那の駆るエクシアRⅡと、リボンスの0ガンダムがぶつかる。人類と分かり合うことを拒んだりボンスと戦い相討ちとなりダブルオーを破壊されるが、機体をエクシアRⅡに乗り換え、同じく0ガンダムへ乗り換えたリボンスと最後の戦いに挑む刹那。

そして、また同じ刻――

「――分かった。その願い、聞き届けた」

ルルーシュ・ランペルージも、自身の機体、屋気楼に搭乗して最前線に出ていた。

戦いの相手は大宦官とブリタニア。己の戦略で最悪の戦況を一転させ、奇跡を起こすゼロ――ルルーシュだった。

だが刹那とルルーシュも戦いの最中、謎の光に包まれ、その姿を戦場から消してしまう。

＋＋＋

そして光に包まれた四人——早乙女アルト、キラ・ヤマト、刹那・F・セイエイ、ルルーシュ・ランペルージたち、時間は各人とも別々に、しかし同じ場所で目を覚ます。

しかも目を覚まして全員、共通に同じ人物が立っていたのだ。目を覚ました場所は森の中。その森の中で立っていた人物は、不思議の国のアリスでそのアリスが着ているような青と白のワンピースにウサミミを着けるといった、複雑怪奇な格好をしていた。

「やあやあ、よく来たね。その珍妙奇天烈な顔、どうやらこの世界について疑問があるみたいだね。でも、そんなこと天才の束さんは知らないよ」

そう言っ て彼女、束と名乗った人物は微笑を浮かべ

「——とりあえず、IS学園に向かってもらうから」

こうして、別世界の人間たちは束に出会い、IS学園へと向かわれるのであった。



## プロローグ（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます！

もし、感想や意見、アドバイスなどありましたら是非お願いします。

## 第一話「早乙女アルト」

「………、………、………、………、………」

早乙女アルトは、IS学園の教室前で、一人ため息をついていた。アルトがこうしてため息をついている原因は、見知らぬ地で出会った束という人物に、半ば強制的にこのIS学園に連れて来られたからである。

束は森の中で出会った際、突然とIS学園にアルトを送り出した。説明もままならない状態で、問答無用でIS学園に来させられたアルト。転校生として一年二組に入ることになった。年齢的には二年なのだが、束がアルトの戸籍の年齢をいじり、一年に転入することになった。他にも、色々難しい問題を束は裏で暗躍し、アルトを入学させた。

最近知ったのだが、束のフルネームは「篠ノ之 束」らしい。しかも、とんでもない天才のようだ。

そして、束は出会いがしらに、ここは元いた世界とは別の世界だと言っていた。その事を束に問い詰めようとしたら一蹴され、IS学園に通っていたら教えると言われてしまった。

知らない世界の学校にいきなり転入だなんて、即刻断りたいところなのだが、この世界で匿ってくれるのは束だけなので相手の言う通りにするしか選択肢がなかった。

（ランカを助け出して、シェリルの元に戻らなきゃいけないのに………！）

元の世界の出来事を思い出し、拳を強く握る。

だが、いつまでも元の世界のことを考えている訳にもいかないの  
で、頭を切り替えることにする。

「早乙女。入ってきて」

教室の外で待っていたアルトは、女性担任に促され、一年二組の  
教室へと入る。

アルトは、ドアを開けてクラスに入り、黒板の前に立つ。

「じゃあ早乙女、挨拶を」

「あー、早乙女アルトです。えっと……よろしく」

不慣れな挨拶をして、教室を見渡す。すると、皆（女子のみなの  
だが）シーンとしている。

その固まった空気に、何か自己紹介をミスったかと考えていると

……

「きゃ……」

「ん？」

「きゃああああ——っ！」

誰かが声を漏らした瞬間、突然とクラス中の女子が甲高い声を上  
げた。

俺は謎の事態に戸惑う。

「やっとうちのクラスにも男子！」

「しかも最強に美形！ 女の子みたいに綺麗！」

「美しい……」

「姫って呼びたいっ！」

叫んでる女の言葉に怒鳴りたくなっただ、気持ちを必死に落ち着ける。

女とか姫って呼ばれるのは嫌いなのだ。

「あー、皆静かに！ 他のクラスに迷惑でしょ！」

そう女子生徒たちを宥めようと、担任の先生が声を張る。

何とか静かになったが、未だにクラスの空気は浮き足立っている。

「じゃあ早乙女の席はあそこね」

「はい……」

担任に指示された空席に鞆を置き座る。

すると、自意識過剰とかではなくクラス中の視線が俺に向けられる。まあ、クラスに男が俺だけだから仕方ないと思うけど……。

しかしこういうのは正直困る。昔から周りに奇異の目で見られることがあり、こういう慣れているつもりだったが……やはり落ち着かない。

「はあ……」

自分の席に座りながら、またため息をついた。

十  
十  
十

「ねえねえ、早乙女君って専用機持ちなんだよね？」

「あ、まあ、一応な……」

「どこの国出身なの？」

「日本だけど……」

「早乙女君の趣味ってなに？」

「早乙女君って見れば見るほど、綺麗な顔だね」

「え、えーっと……」

一時間目の授業が終わり、今は休み時間だ。だが、休み時間になった瞬間に女たちが一斉に俺の席に押し寄せ、質問をずつとしてくる。

なるべく新しいクラスだし、勝手を知らない場所なので、なるべくクラスの奴たちとうまくやっていきたい。なので、普段なら答えないとこだが、質問に答える。しかし、流石にこの質問の波を捌くのはキツくなってきた。

そんな時、クラスのドアが開けられる。

「——えーっと、ここのクラスに男子がいるハズなんだけど……おっ、その中心の奴か！」

新たに入ってきた人物は男子生徒で、俺の周りに出来ている人だかりを掻き分けて来る。

その男子生徒は俺の元まで来ると、急に手を掴んできた。そして、そのまま俺の手を取ってクラスの外に歩いて行く。

「……ちよつ、お前なんだよっ!？」

俺は突然の出来事に、手を掴む男に抗議する。

「悪いな。俺、こいつに用があんだよ」

「ええ」

「でも、早乙女君と織斑君が手を繋いでる姿、最高……」

「日本に生まれてよかった」

俺は男子生徒に連れられるまま、教室の外にでる。

そこで相手は俺から手を離し、向き直る。

「あー、悪かったな。お前が女子に囲まれてるもんだからさ」

「……いや、助かった。困ってたところだったしな」

そう言うと相手は苦笑いする。そして、なにか思い出したような素振りをして、俺に手を差し出してきた。

「おっと、忘れてた。自己紹介がまだだった。俺は織斑一夏、よろしくな。一夏って呼んでくれ」

「早乙女アルトだ。俺のこともアルトって呼んで構わないぞ」

「分かった、アルト」

相手の手を取って握手し、自己紹介をする。

「にしても大変だろ？ クラスに一人だけ男って。丁度、女子に囲まれてんじゃないかなって思って、見に来たんだよ」

「……ああ。ホント面倒だよ」

俺が苦い顔をするのを見て、一夏は軽く笑う。

「まっ、なんか分からないことあったら気軽に聞いてくれ。出来る範囲で答えるから。じゃっ、俺もそろそろ自分のクラスに戻るな」

「そうか。じゃあな一夏」

「おう。俺のクラスは一年一組だから、なんかあったら来いよ！」

そう言っで一夏と分かれる。まともな話相手がいてホッとし、安堵の息を吐いた。

＋＋＋

そして二時間目、担任と副担任がクラスに入ってきた。  
確か、次の授業はＩＳ基礎理論授業だ。

「えー、授業の前に、今度行われるクラス対抗戦についてだけどー  
ー」

「はいつ、先生！ 私、クラス代表生を辞退したいです！」

何やら俺の知らない単語が飛びかっいて、何のことだがさっぱり分からない。

「え、でも……」

「その代わり、早乙女君を代表に推薦します！」

「え、俺っ！？」

突然、自分の名前が出てきたので人事に聞いていられなくなってきた。

しかも、その女子生徒の案に他の生徒も乗ってきて

「うん、それ良い！」

「やっぱり、せっかくの男子生徒だしね！」

どんどんその意見に支持する生徒が出始めてきた。

「ちよつ、ちよつと待て！ 絶対俺はクラス代表になんかならないぞ！？」

俺は席を立ち、心からの抗議をする。だが、このクラスに誰一人として、俺の意見を聞き入れる者は居なかった。

＋＋＋

時刻は夜。アルトは昼間に起きたことを忘れるため、気分転換に散歩をしていた。

必死の抵抗もむなしく、アルトは最終的に専用機持ちという理由でクラス代表に決定してしまったのだ。

「はあ……専用機持ちって言うても、そもそもISなんて動かしたことはないってのに……」

そう、アルトは基本的なISの基礎知識は叩き込まれたのだが、一番重要なIS起動経験がない。

束が言うには、自分の耳についているイヤリングが、俺の専用機の待機形態となっているらしい。なので、専用機持ちという設定になっているのだが……。

不意にIS起動の練習でもしてみようかと思っただが、やはり面倒だし止めておくことにする。

そのままアルトは、落ち込んだ気分のまま、ぶらぶらと本校舎の周りを歩く。

しかし、突然と不穏な風が吹いた気がして、後ろを振り向く。

そこで見たのは、小柄な体格をした少女だった。まだ暖かな四月の夜風になびく髪は、左右それぞれを高い位置で結んで、活発的なツインテールにしている。

顔は一見日本人に見えるが、鋭角的でありながら艶やかな瞳は、まさに中国人のそれであった。

だがその少女の表情は怒気に溢れていて、こめかみ辺りに血管マークがついている。

「——アンタが二組のクラス代表なんでしょ？」

「……そうだけど」

怒りに包まれている少女は口を開け、質問してくる。その声は、とても静かだった。

「だったら代表の座、この凰鈴音に譲って。実力的にも、その方がいいしね」

俺は見ず知らずの女に突然そんな事を言われ、ムツと腹を立てる。

「はあ？ 元々そんなものには興味ねえけど、オマエに譲る気はないね」

「……ああ、そう」

相手の申し出を断ると、周と名乗った女は俯いてしまう。その様子に、ちよつと言い過ぎたかなと思った矢先――

「なら、実力行使で譲ってもらうから！」

少女の声が、人通りの少ない夜の道に響き渡る。すると、一瞬の間に少女の体は、攻撃的なラインをしたISの装甲を身に纏っていた。

（――これが、ISなのか……！）

初めて実物で見るISはとても重厚な見た目で、とてつもない圧迫感を感じた。

「悪いけどあたしは、どうしてもクラス代表にならなきゃいけないのよ。どっかの馬鹿のせいだね！」

だから、痛み目みたくなかったら、あたしに代表を譲りなさい」

「……誰がお前なんか」

「そう……なら、この『甲龍』で叩きのめしてあげる！」

「――くっ！」

そう言って迫ってくる凰に、俺は身を強張らせる。

多分、手加減してくるだろうが、生身での攻撃を食らえば一発でのされるだろう。

その事に俺は、何も出来ない自分を腹立たしく思う。

（ちくしょう！俺にもISが操作できるって言っなら、さっさと起動しやがれ！）

心の中で自分を強く叱咤し、歯を食いしばる。

そして、ぎゅっと閉じた瞼の向こうに、自分のよく知る機体を思い浮かべる。それは、戦場を自分と共に駆けたVF-25Fだった。

「——来いっ！」

意識を集中したアルトを、光の粒子が包み込む。

だが、その時には近くに迫っていた凰の乗る『甲龍』の攻撃がアルトを狙っていた。

しかし、その攻撃がアルトの体に触れることはなかった。

——『VF-25F』と同じ装甲を身に纏ったアルトが、『甲龍』の右拳を受け止めていたのだから。

「なっ！？——へえー、あんたも専用機持ちって訳……なら、手加減しなくてもいいか！」

先ほど放った、手加減をした攻撃ではなく、今度こそ本気の右スレート凰は放った。

だが、それをアルトは難無くバックステップを踏み、簡単に避け

てみせる。

「……俺にも、IS操作できるじゃねえか！」

アルトは強く願ったものの、本当にISを起動できると思っていた  
なかった。しかもそのISが、自分の元いた世界での愛機なのだから、さらに驚く。

今のアルトの姿は『VF-25F』と同じ装甲を、腕や脚などに部分的に展開して、その下にEX-ギア（エクスギア）を着ている。しかも、何故か体が知っているかのようにISを操縦できる。

「なんだよ、案外でかいこと言ってた割には、お前大した腕じゃないのな」

「！ あったまきた……なら、あたしの實力見せてやろうじゃない」

「やってやるよ！」

凰は両端に刃の付いた、というより刃に持ち手が付いた感じの馬鹿でかい刀を持って切り込んでくる。

それに俺は、「アサルトナイフ」を形成して迎撃体勢に入る。

互いの距離は一瞬で詰まり、凰の刀と俺のナイフがぶつかり、刹那の攻防戦が始まった――

## 第一話「早乙女アルト」（後書き）

えー、アルトを二組に入れてしまつて良かったのかな……  
後、矛盾など起きてないかが心配；

ちなみに、次はキラと刹那の話にしようと思っています。

もし感想や意見、アドバイスなどありましたら是非作者までお願いします！

## 第二話「キラ・ヤマト、刹那・F・セイエイ」

「ねえねえ、あの話聞いた？」

「聞いた聞いた！　またうちのクラスに転校生が来るんでしょ。しかも男子！」

「ホント一組になれて最高だよ〜」

俺、織斑一夏は自分の席に座っていると、近く的女子のおしゃべりが聞こえてきた。

どうやら、うちのクラスに男の転校生がくるらしい。二組のアルトといい、最近は男子の転校生が多いな。

「なんか、世界で唯一ISが使える男——っていう俺の肩書きも、呆気なかったな」

「ん？　どうかしたのか、一夏？」

「いや、何でもない」

独り言を呟いていると、箒とセシリアが俺の席までやってきた。

「それにしても、最近転校生が多いですわね。二組にも、先日着たばかりの早乙女アルトさんに加えて、今日また中国の代表候補生の方が来るようですし」

「へえー……」

（中国の代表候補生か……。そう言えばここって、転入の条件がかなり厳しかったな。そもそも試験自体、国の推薦がないとできないはず。……って言うことは、うちのクラスに来る男子ってのも代表候補生なのか？）

俺が転入生について考えていると、セシリアはいつもの腰に手を当てるポーズをする。やっぱり、その姿はモデルのようにキマっていた。

「ふふん。やはり、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

「——お前ら、さっさと席に座れ。朝のホームルームをはじめる」

ドスの聞いた声と共に、担任の千冬姉と山田先生がクラスに入ってきた。

千冬姉はクラスの生徒が全員席に座するのを確認すると、横の山田先生にバトンタッチする。

「皆さん知っていると思いますが、今日は転校生を紹介します！  
しかも二名です！」

「『えええええっ！？』『』『』」

俺も山田先生のその言葉を聞いて、声を上げてしまいそうになった。転校生が来るとは聞いていたが、まさか二人だとは。

どうやらその事はクラスの全員が同じようで、皆驚いている。そして、教室のドアを開けて件の転校生が二人入ってきた。

「初めまして、キラ・ヤマトです。この国に来たばかりなので慣れないことばかりですが、どうかよろしくお願いします」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

転校生であるキラは、同じ転校生である刹那と並んで挨拶をする。この二人の容姿は端整でいて共にかんりのハイレベル。なので当然、その二人を見ればクラスの女子は――

「いやああああ!!!!」

「ヤマト君かつこいい!!」

「私はセイエイ君!」

「またもこのクラスに男子! 一組になって良かったあ!」

女子は喜びのあまり、幸せそうな顔をして叫び声を上げる。そのクラス中の反応に、キラは驚いて半歩後ずさる。

「……………」

どうやら驚いたのは隣の転校生も同じようで、信じられないものを見る目で騒いでいる女子生徒を見ている。

「今はHR中だ。少しは静かにできんのか、馬鹿者どもめ」

担任の織斑先生が面倒そうに、クラスの女子生徒を静まらせる。その声に反応して、クラス中が話すのを止めていく。織斑先生はこのクラスでかなり発言力が大きいようだ、覚えておこう。

「それではヤマト君の席があっちで、セイエイ君の席がそこなっていますので」

僕と刹那は、副担任の山田先生に指示された席に座る。

だが、席に座った瞬間にいくつもの視線が僕に向けられる。IS学園に入った以上、ある程度はこうなることを予想していたが、これはかなりキツイ……

「それと織斑。同じ男子同士、ヤマトとセイエイの面倒を見てやれよ。——さて、これでHRは終わりだ。各人、次の授業の用意をしる」

＋＋＋

「ふう……」

キラは一時間目の授業を終え、息を吐く。

入学する前にISに関する基礎知識はほぼ完璧に覚えたので、授

業が分からないということになった。だがしかし、クラスの何人かにずっと視線を向けられながら慣れない学校の授業をしたので、スーパーコーディネーターといえど疲労を感じる。

「やっぱり、この感じに参ってるみたいだな」

そう言って話しかけてきたのは、先生に織斑と呼ばれた男子生徒だ。

「うん……。周りにこう見られてと……」

現在クラスだけではなく、廊下の方にも生徒が集まって、転校生である僕と刹那を見ていた。

窓際の僕はまだ良いとして、廊下側の席に座る刹那はかなりキツいだろう。

「おい。刹那もこっち来いよ！」

「ああ……」

疲労が見える顔で、刹那は僕の席の方に来る。

（……だけどこの動き、訓練された人間だ……）

近付いてくる刹那の動きを見て、軽く警戒をする。まあ、悪意などとは感じられないので、とりあえず様子を見よう。

「お前らも大変だな。まあ、しばらくすれば女子も騒がなくなると思っぜ」

「……そう願いたい」

「ははっ。俺は織斑一夏だ。まっ、二人とも一夏って呼んでくれ」

「うん。僕のことキラでいいよ」

「俺も、刹那で構わない」

そうして二人と話していると、近くの席の女子が話しかけてきた。

「ねえねえ、キラちゃんと刹那くんって、代表候補生なんでしょ？」

「うん、そうだよ。僕はアメリカ代表候補生」

「俺はイスラエルだ」

一応、非公式だがそういうことになっているらしい。らしいと言うのは、強制的に僕をIS学園に入れた東さんがそう設定したからだ。ちなみに、僕の年齢も15歳ということになっている。

「じゃあさ！ 専用機もあるんだよね？」

「うん」

「一応な……」

ISの待機状態になったネックレスを触る。  
このネックレスが僕のIS、フリーダムらしい。このネックレスも東さんに渡されたのだ。

「じゃあうちのクラス専用機持ちが四人だ！　もう無敵の戦力だね！」

「——それはどうかしら。二組も、専用機持ちが二人になったの。そう簡単にはいかないから」

女子たちが楽しそうに談話をする中、突然教室の入り口から声が聞こえた。声の主を見ると、腕を組んで教室のドアの入り口に片膝を立てていた。

「……お前、もしかして鈴か！？」

どうやらその人物に、一夏は心当たりがあるようだ。

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「じゃあお前もしかして、クラス代表になったのか？」

「……………それは、あたしじゃないけど……………」

「は？」

鈴という少女は頬を染め、焦り始める。

「……………——だ、か、ら！　クラス代表はあたしじゃないって言うてるの！」

逆ギレ気味に怒鳴り、それを一夏は——

「ぷっ！ な、何だよ、俺はてっつきりお前がクラス代表になったかと……ぷっ、あっははは」

「わ、笑うじゃないわよ！！」

腹を抱えて笑う一夏に、鈴は顔を赤くして叫ぶ。流石に、そんなに笑うのは失礼だと思うよ、一夏……。

「だっ、だってお前、あんなに格好つけて入ってきたのに！」

未だに笑いを堪えきれないといった様子でいる一夏に、鈴は涙目になり

「だっ、だったらクラス代表の奴を連れてきてやるわよ！ —— アルトーっ、アルトーっ！」

鈴は廊下の方に向かって、人の名前を大声で叫ぶ。すると、不機嫌そうな顔した生徒が一組の教室に入ってきた。

「おい、いきなり人の名前を叫ぶなよ！」

とても綺麗な容姿で、女性みたいな顔をした——多分、制服がそうなので、男子生徒なのだろう。その男子生徒の肩を鈴が叩き、誇らしげな表情をする。

「これがうちのクラス代表、早乙女アルトよ！」

「って、アルトが二組の代表なのか！？」

「言ってなかったか？」

「全然聞いてないぞ。同じ部屋なんだから、教えてくれよな」

アルトという生徒が代表だと聞き、驚いた様子をする一夏。

——ちなみに、男同士ということなので、つい先日に一夏の部屋にアルトが引越して来たのだ。なのでアルトは現在、箒と入れ替わって一夏とルームメイトとなった。当然、箒はこのことに心中穏やかではない。

「あれ、一夏とアルトってルームメイトだったの？」

「まあな。——って言うか鈴。お前、まだ反省文織斑先生に提出してないだろ。大丈夫なのか？」

「あつ、忘れてた！」

「お前なあ……またあの人に厳重注意受けたいのかよ……」

そう言つと、二人は顔を真っ青にし、さらに体を小刻みに震わせる。なんかあつたのだろうか？

「あー、そういえば。昨日アルト、クタクタで帰ってきたけどなんかあつたのか？」

「っ！ ま、まあ……色々とな……」

そう言つて彼は微妙な表情をして黙り込む。その様子に、一夏は不思議そうな表情を浮かべ、小首を傾げる。

「……それじゃあ、あたしたちそろそろ行くね……」

肩を落としながら、教室のドアへと向かう鈴。その足取りは重く、入ってきた時とは別人だ。

「あつ、そうだ鈴！ 思い出したんだけど、お前が国に帰る時に何か約束したような……」

「——あ、それならもう大丈夫だから。あたしにも、良い人がいたしね」

一夏に返答する鈴のその表情は晴々していて、表情に一切の曇りがなかった。まるで、何かに決着をつけた後の様だ。

「あんたもいい加減、ハッキリした方がいいわよ。まっ、もうあたしには関係ないけどね」

そう言い残すと、鈴はアルトの手を引いて教室を出て行った。僕は一連の出来事を見ていただけだったけど、あの鈴という少女が嵐のように感じられた。

そして一夏の元に女子生徒が二名集まって、何やら揉め始める。

「一夏さん！ さっきの方とはどういう関係ですよ！？」

「お前、まさか付き合っているのか！？」

「違うって。ただの幼なじみだよ。箒が引越した後に、鈴が転校してきたんだ。まあ、セカンド幼なじみってとこだな」

なんて説明している一夏の姿を見て、自然と笑みがこぼれる。こんな平和な学校も、悪くない気がしてきた。

＋＋＋

「特訓ですわ！」

昼休み、刹那・F・セイエイはIS学園の食堂にて、セシリア・オルコットのつんざく声に反応をする。

現在、食堂には刹那、キラ、一夏、箒、セシリアが昼食をとっていた。ちなみに、刹那が食べているメニューはガリーエ・マーヒーという魚のシチューだ。

「どうしたんだセシリア急に？」

「急ではありません！ 二組にはあの凰鈴音さんがいるんですよ！」

「そつだ一夏！ クラス対抗戦で二組に負けるなど、絶対に私が許さん」

どうやら、一夏は二人の突然のやる気に驚いているようだ。

（……やはり、イノベーターとしての能力がなくなっているか……）

そう改めて実感する刹那。現在の自分は、四年前の頃の姿に戻っていた。記憶などはハッキリ残っているのだが、自分のイノベイターとしての能力を失っている。

あの森の中で出会った束という人物曰く、『それは仕方ない』らしい。どういう意味か問い詰めようとしたが、見たことのない飛行装備で逃げられてしまった。

残された俺には、逃亡する前に束が手配したIS学園に転入する道しかなかった。

「そう言われてもなあ……」

「だから、クラス対抗戦に向けて特訓が必要なのです。なので一夏さんは放課後空けておいてくださいね。この、専用機持ちであるセシリア・オルコットが直々に指導さしあげますわ」

「わ、分かった。——なら、キラと刹那も一緒に訓練しようぜ。二人の戦いも見てみたいしな」

一夏はこちらに顔を向けて、訓練を誘ってくる。断る理由もないし了承していいだろう。それに——奴の戦闘を見てみたい。

「うん、僕は良いよ。刹那は？」

「俺も同行しよう」

このキラ・ヤマトという男、何か普通ではない“なにか”を感じる。特に周りを警戒している訳でもないのに、奴からは一切の隙が見つからない。まるで、あの男のような……

とはいっても、これは自分の直感でしかないので、それを是非確

かめたい。

「……まさか、こんな大人数で訓練することになると思いませんでしたけど、まあ良いですわ……それでは皆さん、放課後に第三アリーナに集まってください」

「それが、お前のISか……」

「ああ、『白式』って言うんだ」

一夏の展開したISを見ながら、自身の知っているIS関連の記憶と照らし合わせる。

(……なるほど、思っていたよりも洗礼された姿だ)

現在、放課後となり、第三アリーナ。キラ以外のメンバー、一夏と篝、セシリアが集まっていた。

「さーてと、キラの奴は……おつ、来たみたいだぜ」

「ごめん、ちょっと用事があった」

「——っ!!」

俺は、ピットから走ってきたキラの姿を見て、目を大きく開いてしまう。

そのキラの姿が、俺の着ているISスーツに似ていたのだ。この俺の着ているISスーツは、元の世界で愛用していたパイロットスーツに外見がかなり酷似したものだ。それと似ているISスーツを着ているということは、何か俺の元の世界に関係があるのかもしれない……。

「おっ、やっと来たかキラ。そうだ、刹那とキラで模擬戦闘してみてくださいか？ 二人のISとか操縦見てみたいしさ」

「ああ、俺は構わない」

丁度いい、これはキラを確かめるチャンスだ。

「僕もいいよ。それじゃ刹那、よろしくね」

「ああ……」

そう言つと、キラは目を瞑って集中し始める。ISを展開する気なのだろう。

「——フリーダム！」

一瞬爆発的にキラの立っていた場所が光る。すると、キラは一秒と経たずにISを展開した。だが、驚くべき点はそこでない。

「…………ガン、ダム…………」

キラは部分的に装甲を纏い、ISを展開した。その姿は青い翼を生やしていて、部分装甲が明らかにガンダムタイプに酷似していた。それに今度こそ俺は、驚愕して声をなくした……。

## 第二話「キラ・ヤマト、刹那・F・セイエイ」（後書き）

なんとか更新……だけど、急いで書いたため、誤字がないか怖い；

それで、何か追加してほしい作品やキャラがいましたら是非教えてください。

検討して良いなと思ったら、採用させていただきます！

今のところはヒロを追加するか考え中です。

それでは、ご感想や意見、アドバイスなどありましたらお願いします。

### 第三話「ルルーシュ・ランペルージ」(前書き)

更新遅くなって本当に申し訳ありませんっ；

それと、今回は少し長めの話となっております。

えー、飽きずに見て頂ければと思います。

というか、今回の話で矛盾とか起きてないか心配；

### 第三話「ルルーシュ・ランペルージ」

『sideルルーシュ』

「——とりあえず、IS学園に向かってもらうから」

突然、見知らぬ森に飛ばされたルルーシュ・ランペルージは、目の前の奇天烈な格好をした女を睨む。

「……どういう意味だ？　そもそもお前は誰だ？　まさか、俺がこうなっているのもお前が原因——」

「そんなの、この束さんに答える義務はないよ」

不可解な現状を探ろうと、この束という女に話しかけるが、反応がない。

この女、完全に俺の存在をどうでもよさそうにしている。どうやら、俺の質問には完全に答える気はないのだろう。——だが、その事に関係ない。

「……………だつたら」

ルルーシュの細く長い指が、左目に向けられる。そして、左目を覆っていたコンタクトレンズを外す。

「——今から俺の質問に答えろ」

手を離れた瞬間、ルルーシュの目は普段の紫水晶に似た瞳ではなく、もっと赤く禍々しく輝いていた。瞳の底から浮かびあがった奇怪な模様。空に向かって鳥が羽ばたくような。

——『ギアス』。

その力は、ルルーシュの瞳が今の状態で次に口にした言葉は、絶対遵守の命令となって、相手を呪縛するものだ。

なので、相手と直接目を合わせた現在、絶対にルルーシュの命令に従うはずなのだが

「ああ、『ギアス』を使っても無駄だよ。天才の束さんには、『ギアス』なんて通用しません」

「な、なにっ……」

確かに相手の言うとおり、ギアスが通用していない。ギアスは完全に成功したはずだったのだが……。

想定外の事態が起き、目は大きく開いて、顔が強張ってしまふ。

今の状況を整理し、ギアスが効かない相手の存在について幾通りの考えを巡らせる。

「いくら君が私の正体について考えたって無駄だと思うよ。それよりも、君にはIS学園に行ってもらわないと」

「だから、そのIS学園とはなんだ！？ 俺にどうしろと言っつ？」

「あはは。君ほどの頭脳をもった人間でも、こういう不測の事態には酷く狼狽するんだね」

「くっ……！」

完全に相手にペースを掴まれ、ルルーシュはうめき声を漏らす。確かにルルーシュは類稀な頭脳をもっているが、この束のような行動を予測できない者、イレギュラーには弱い。

「まあ私には到底及ばないにしても、そこそこの頭をもった君なら、束さんの言うとおりにした方が良いことくらい分かるよね？」

さらにルルーシュは、心の中で苦しい声をあげる。認めたくないが、ここは全く知らない地だ。見たところ、ここには野生の動物が住んでいるような跡がない。だとすると、誰かが手を加えている土地という可能性が考えられる。束が所有する土地なのかもしれない。そんな中で相手の申し出を断って逃げたとしても、ギアスを使う間もなく殺させるだけだ。

しかも、束はギアスを知っている上に、その力が通用しない。そんな相手を敵に回すのは得策ではない。

「……いいだろう。貴様の言うとおりにしてやる」

腸が煮えくり返るほど腹立たしいが、仕方なく相手の要求を呑むことにする。

「やつぱり君は、四人の中で一番話しが早いね。——だけど、一番厄介な存在も君だけだ」

俺にはなにを言っているのか分からないが、そう言って束は口元に微笑を浮かべていた。

束の条件を呑んだ後は、彼女に連れられて飛行機に乗り、日本へと向かうことになった。

機内で束にこの世界についての膨大なデータを渡され、それを余すことなく頭に叩き込んだ。

それを見て、自分のいた世界とは異なった歴史を進んでいる世界を短期間で覚える。そして、一番目についた『IS』という兵器のおおよそも把握した。

そして、情報を覚え終わり、改めて元いた世界について束に聞くが、こちらの言葉など聞こえていないかの様子で、何の反応もしない。

自分の質問に全く答えない相手に情報を引き出す試みを諦める。と思つたら、突然束はブレスレットを俺に投げ、

「それが君のISだよ」

「どういうことだ。ISは女にしか使えないのではないのか？」

と質問するが、また聞く耳をもたなくなってしまった。

C・C並みか、それ以上にやり辛い束という人物に、頭を痛めながらもおとなしく渡されたブレスレットを付ける。

そしてあつという間に到着した飛行機は、人が一切いない場所に

着陸した。

そこで気付いたが、今まで乗っていた飛行機には俺と束以外に誰も乗っていないかった。かなりの小型で、人が全然いないことは分かっていたが、搭乗者がゼロとは。しかもこの飛行機、かなりデタラメな速度で移動していた。

（やはり、ISの発明者といったところか……人目を忍んで行動しなくてはいけないとは）

そんな感想を抱きながら、ずっと束の隙を伺う。もしもの場合は、束を力で押さえつけて情報を吐かせる手を考えているからだ。

「じゃあ君のIS学園への転入は手配したからね。多分、転入は来月ぐらいになると思うから、どこかホテルに泊まっておいで。ちなみにここら辺はIS学園の近くだから安心して」

そこで札束を渡される。

「転入前に制服やら、君の身分証明書も手配させるから」

「構わないが、俺の宿泊した場所に送れるのか？」

自分が適当に見つけた場所で宿泊した場合、その場所を束は知らない訳だ。それでは荷物を送れるはずもない。

「大丈夫。君がどこに居ようが、この束さんにはすぐ分かるから」

やはりか、という気持ちを表にでないように抑える。どういう手段で俺の居場所を把握するのは知らないが、監視されることは予測していた。

「それで、君のこの世界での設定はメンドクサイから、どこかの国の代表候補生とかじゃなかっただのー学生にしとくから。だから、あんまり自分の専用機を出さない方がいいよ。うーん、そうすると普通のISも必要かぁ。じゃあコレ、『打鉄』も渡しとく。それと地図。これでも見て、街でも探がして。優しいねえ、束さんは」

すると束はどこかへ歩きだしてしまった。

結局付け入る隙もなく、過ぎ去っていく束の後姿を見ながら、ルルーシュは艶やかな黒髪を軽くかきあげて小さく息をついた。

束と別れた後、渡された地図を頼りに街へ出て、適当なホテルに宿泊した。さらに、この先必要な物を色々と買い集めた。まあ、束から多く金を渡されたのでそう困ることはないだろう。

そして、さらに情報を集めたルルーシュは、一度、自分が転入するIS学園を見てみようという気になった

そう思ったルルーシュは現在、IS学園の敷地内に居た。

外からハッキングし、監視などの穴を見つけてIS学園内に侵入したのだ。リスクが高いとも思ったが、見つかった際には束の名前を出せばいいし、使いたくはないがギアスという手もある。

そう思いIS学園に入ったルルーシュは、事前に調べておいたルートを進み、敷地内を回る。今進んでいるルートは、データをハッキングし自分で演算して導き出した、人に見つかる確率が一番低いものだ。

やはり想定していた通り、まったく人に出会うことなく順調に進める。

「これがIS学園か……」

時折離れた場所で見かける生徒は、本当に女子生徒ばかりだ。男子生徒が居るらしいのだが、見当たらない。公式で発表されているのは織斑一夏という男と、非公式ながら後三人いるはずだ。

（——この短期間に、女しか使えないと言われている兵器を動かす男が四人も集まる……この状況は不自然だ）

そう、ルルーシュがわざわざリスクの高い荒業をしてまで来た理由、それには男子生徒が半分を占めていた。

IS学園の情報を集めていた時に、転入した三人の男子生徒がいたことを知った。織斑一夏、そして自分ルルーシュ・ランペルージも合わせると、男が五人にもなる。

このことに違和感を覚え、転入する前にこの不確定要素を確かめておきたかったのだ。

「ん？ ISの模擬戦か」

男子生徒について考えていた矢先、自作したISセンサーに反応があることに気付く。

丁度いいと思い、ISが存在するアリーナの中に入っていく。

『sideルルシュ end』

『side刹那』

「当たれっ！」

「くっ！」

キラが放った正確無比の射撃を、ギリギリのタイミングで回避する。

回避したのも束の間、すぐにキラは距離を詰めてきた。

「なめるな！」

自分の機体——ダブルオーガンダムの装備、GNソードIIでキラを迎撃する。

「っ！」

キラのビームサーベルと、ダブルオーのGNソードIIが刹那の鍔迫り合いを演じる。

だが、俺はキラのビームサーベルを受け流してみせる。それによってキラに隙が生まれ、そこにGNソードIIを斜めに走らせる。

「くっ！」

しかし完璧なタイミングで放った俺の斬撃を、キラは人間離れした反射神経をもって回避した。

さらにキラは回避すると同時に、機体の腰部に搭載された実弾兵器を撃ち込んできた。

「——ぐあっ!?!」

俺は完全に不意をつかれ、モロにキラの実弾兵器を受けて吹き飛ばされてしまう。とてつもない衝撃で、十数メートルは後退させられ、しかもシールドエネルギーを大幅に奪われた。

(……キラ・ヤマトのこの腕、あの男以上かもしれない……)

宿敵ともいえるグラハム・エーカー。奴は機体性能差などものともしない圧倒的な技量をもって、幾度も対峙してきた。

しかしキラは、そのグラハム並みかそれ以上の操縦技能だ。

俺は倒れていたダブルオーを起こし、GNソードIIを連結させる。そして、キラの次の動きを伺っていると——

「刹那、もうやめよう。君のその機体では、これ以上無意味だ」

「――！」

突然、キラは武器を降ろすと、模擬戦をやめようと提案してきた。この行動には驚きもし、酷くプライドを傷つけられた気分だったが

「……分かった。今の俺には、お前のガンダムを超えられない……」

確かにダブルオーでこのままあの機体と戦っても、結果は目に見えてる。せめて、ダブルオーライザーであれば……

そしてキラは、俺が『ガンダム』と口にしたことに驚いた様子だった。

『side刹那 end』

『sideルルシュ』

「なんだ、もう終わりか。観戦するのが遅かったかな」

ルルーシュは第三アリーナの観客席から、IS同士の模擬戦を途中から眺めていた。なのだが、模擬戦はすぐに終わってしまう。

「だが、わざわざ来た価値はあったか……」

戦っていたあの二機のIS、明らかに既存のものではない。不自然に現れた、男子生徒とIS。やはり、これはおかしい……

「これは、一度ホテルに戻って戦闘データを――」

「そのアナタ！　ここで何をしていますの？」

途中から撮った模擬戦の戦闘データを見直そうと考えていると、凜とした鋭い女の声に背後から呼び止められる。

（しまった……ISのハイパーセンサーに引っかかったか……）

だが、このぐらいは予測範囲内の事だ。適当な演技をして、相手から逃げればいい。ここで下手な行動をしなければ、後でどうにでもなる。

「ああ、俺は今度転校してくる者なんだが……」

「――っ！」

説明するために声の主へと振り返る。そこには、「鮮やか」という表現が一番正しいであろうISスーツを着た女が立っていた。ふんわりとして柔らかそうな金髪の髪に、白人特有の白い肌にブルーの瞳。それらを引き立たせているのが、彼女の纏う高貴なオーラだ。この感じは、貴族辺りの良いところでなんだろう。

その彼女の表情は、俺と顔を合わせた瞬間に固まってしまっている。

突然どうしたのだろうかという疑問が生まれたが、好機と考える。

「おっと、すまないが時間なので失礼させてもらう」

「……あっ！ お待ちになって！」

声が後ろから聞こえたがもう遅い。あの女が呆けてる間に、想定してたルートからすぐに逃げる。

（このルートなら追ってくるのも不可能だろう。センサーに反応しないようにすれば、完全に姿を消せる）

ハイパーセンサーに反応されないよう、ステルス機能を使い逃亡を試みる。

特に下手な行動もしていないし、これなら転校してから彼女と顔を合わしても大丈夫だろう。なにか言及されても、いくらでも言い逃れる方法はある。

自然と口元に笑みを浮かべながら、誰もいない道を愛機、『蜃気楼』を操縦して駆け抜ける。

『sideルルシュ end』

『sideセシリア』

「……何でしたの、あの方は……」

先刻遭遇してしまい、脳裏に焼きついてしまった男の顔を思い出して、途方に暮れる。

刹那とキラの模擬戦を見ていたのだが、観客席に立っていた部外者らしき男を見つけたので確認しに来たのだ。

模擬戦に水をさすのも悪いので、黙って一人で確かめに来たのだが……。

「……あの、瞳……強くて、孤独で……」

顔見た瞬間、いきなり思考が吹き飛んでしまい、頭が真っ白になった。

気を取り戻すと、体中が火照り、とても熱い。それに胸もドキドキしっ放しである。

あの顔が頭から離れない。この感じ、一夏に恋をした時と同じ——いや、それ以上に……

「おい、セシリア！ そろそろ帰ろうぜ」

遠くから一夏の声が聞こえてきたが、何か罪悪感のようなものを感じて、俯くことしかできなかった。

『sideセリアend』

### 第三話「ルルーシュ・ランペルージ」（後書き）

今回から、誰sideか書くようにしました。  
確かに、こっちの方が良い気が。

そして、追加するキャラは依然検討中です。

リクエストしてくださった方、ごめんなさいorz

ちなみに本編の話ですが、キラの機体はフリーダムとなっております。  
す。

それでは、ご感想や意見、アドバイスなどありましたら是非お願いします。

## 第四話「クラス対抗戦」

『sideキラ end』

「そう、君も別世界から……」

「ああ。そして、目を覚ましたら束という人物が立っていた」

現在、IS学園内の僕と刹那の部屋で、互いに知る情報を出し合っていた。

模擬戦を行っていた時の刹那の反応や、彼のIS。そして『ガンダム』と口にしていたことから僕は、刹那がこの世界の人間ではないと確信した。

その事を刹那に話すと、素直に知っていることを答えてくれた。

「やっぱり僕らをこの世界に引き寄せたのには、束さんが大小関わらずなにか関わっているね……」

「俺も同意見だ。どういう目的かは知らないが、奴はなにか知っている」

うん、と小さく答える。しかし、この状況は参った。

束は行方をくらましていて、相手の足取りを掴めないのだ。そうになると、元の世界に戻る方法についての情報が全く手に入らないのだ。

「困ったね……刹那は束さんの居場所とか知らないでしょ？」

「そうだな。奴は会ってすぐにどこかへ居なくなってしまった」

これは打つ手なしだ。八方塞の状況に、ため息をつく。

「……そう言えば刹那も、元の世界で使っていたモビルスーツがISになってるんだよね？」

「装備がなくなっただけではいるが、元の世界で乗っていたガンダムがISになってる。お前もガンダムマイスターなのだから、俺と同じなのだろう？」

「あはは。ガンダムマイスターっていうのではないけど、元の世界で乗っていたモビルスーツが今の僕のISだ」

そう答えると刹那は驚いた様子をする。気になって、『ガンダムマイスター』という刹那のいた世界で存在する、言葉の意味を教えてもらった。

モビルスーツや兵器の概念は通ずるところがあるのだが、やはりお互いの世界は大きく違う。刹那のいた世界について教えてもらい、そう深く思った。

「おい、二人とも食堂に行かないか？」

そして、夕食の誘いに来た一夏と共に、三人で食堂に向かうのだった。

『sideキラ end』

『sideアルト』

アリーナからの帰り途中、校舎に向かっていると、隣で一緒に歩いている鈴が話しかけてきた。

「アンタこれからご飯でしょ？」

「ああ、まあな」

「そ、そう。……だっ、だったらあたしが夕食と一緒にしてあげてもいいわよ？」

「いや……別に一人でもいいんだけど」

そう言つと、鈴は急に歩く足を止めて、怒った様子になり

「あ、アンタ素直に言えないわけ！？ あたしが折角、一緒に行つてあげるって言ってるのに！」

「わ、分かった……だったら一緒に行こう」

最近コイツと一緒に居て、なんとなく凰鈴音という人間が分かってきた。こういう場合は、下手に逆らわない方がいいのだ。

「最初からそう言いなさいよ」

怒った様子が一变し、上機嫌で俺の前を歩いていく。なんだかその姿を見ていると、自然と心が和む。

そして、校舎にたどり着き、目的の食堂に向かう。

だがその途中で、女子生徒に何度も話しかけられて歩みが遅くなる。急いでいると言ってすぐに別れるのだが、鈴は俺が話しかけられる度にむすつとする。

その状況に困り、慌てて食堂へ向かう。

「……なにアンタ、話しかけられてニヤついてんのよ！」

「なっ！？ 別にニヤついたりしてねえよ！」

必死の弁解も空しく、鈴はさっさと自分の夕食を注文しに行く。なんでこんな態度を取られているのか訳が分からない。腑に落ちないが、とりあえず自分の夕食を確保しよう。

そして俺は自分のメニューを持って、先にテーブルにいた鈴の横の席に座る。未だに機嫌は直らず、鈴はぶすつとしながらラーメンをすすっていた。

「……それで、どうなの？」

「どうつて？」

「クラス対抗戦のことよ！」

俺は「ああ」と納得する。まったく、主語を入れるよな。

「まあ何とかなるだろ。お前に訓練を付き合ってもらったしな」

「そ、そう……」

今日まで、明日に控えたクラス対抗戦のために鈴と訓練してきた放課後などアリーナへ行き、鈴としょっちゅう模擬戦などしたものだ。……と言うか、模擬戦ぐらいしかできなかったのだが。鈴のコーチはあまりに酷く、「感覚よ感覚。……はあ？　なんで分かんないのよバカアルト」などとぬかしやがる。

だが、流石は正規の代表候補生だけあって、ISに関する知識と操縦技術はかなり高い。なので、色々と技術を盗ませてもらった。

そして鈴は何故か、急に上機嫌気味になり

「なら絶対に勝って、あたしの所に帰ってきなさいよね」

——その瞬間、最終決戦の出撃前に話した、シェリルとの約束を思い出す。そして、救出できなかったランカ。そしてS・M・S、フロンティア船団のことを思い出し、胸にズキリと鋭い痛みを感じた。

これまでこの世界に来てから、元の世界が心配で仕方なかった。

戦いの半ばでこの世界に来てしまい、気が気でない。

そう考えると、シェリルとの約束も果たせないままにいるのに、さらに約束などと思ったが――

「……分かった。帰ってくるよ、絶対にな」

それでも、隣に居てくれる鈴のためなら、と――絶対に約束を守

るという強い意思を乗せて、言葉にする。

そのあまりに真面目な答えに驚いたのだから、鈴は遅い反応で頷く。そして、暖かい笑顔をばあっと咲かし

「ええ。一夏のばかなんて速攻で倒しちゃいなさい！」

その後、噂の一夏と他に男子生徒二人が食堂に来て、決戦前の夕食を共にした。

夜が明け、ついに試合当日。試合の場は第二アリーナ。そして第一回戦の試合の組み合わせは、一夏と俺。

なんでも、今日のこの試合はかなりに注目されているらしく、アリーナは全席満員。それに乗じて、試合の席を裏で高い値で売買していた生徒も居たらしい。まあ、織斑先生に見つかって厳重注意を受けたようだ。……その生徒は可哀想に。痛いほど気持ちは分かる。

転校してきたばかりの日に織斑先生に受けた厳重注意を思いでしてしまい、軽く気分が落ち込みそうになる。俺はまずいと思い頭を切り替え、目の前の相手に集中する。一夏とそのISである『白式』に。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスの合図で、俺と一夏は互いに至近距離で向かい合う。

「準備はいいか、アルト」

「いいぜ。いつでも来いよ」

ふっと不適な笑みを浮かべる。

「ルームメイトだからって手加減しないからな」

「それはこっちのセリフだ！」

試合開始を告げるブザーが響き、俺と一夏はお互い弾かれるように動き出す。

一夏は瞬時に俺との距離を詰め、手にしている刀を横一閃に振ってくる。

「このっ！」

俺は後ろに後退して斬撃を回避し、すぐさまガンポットを両手で構えて一夏に掃射する。

一夏も機体を回転させてすぐに距離をとり、ガンポットを全弾回避してみせる。

（さすがに、そう簡単にはいかないか……）

必殺のタイミングで撃った射撃を全て回避されたことに、焦燥を感じながらも、手強い相手が出てきたことに嬉しく思った。

今までは命がけで戦ったので、こうやって戦うのは久しぶりだ。

そして、俺のIS『VF-25F』に搭載されているミサイルを一夏に向けて何発も発射する。

「——おっと！」

一夏は追ってくるミサイルを、低空飛行しながらミサイルの追尾を振り払う。

あそこまで地面すれすれで動かれると、ミサイルが当たらないなら……

『sideアルト end』

『side一夏』

「なっ！？ ISが変形した……」

ミサイルの誘導を振り切って低空飛行をしていると、信じられないものを目にした。

アルトのISが変形し、全身装甲の戦闘機となったのだ。

（ISって変形もできるのかよ！　っていつか、あれってどういう仕組みなんだろう）

戦闘機の形になってから全身装甲になってしまったので、現在アルトの顔は見えないが、ISの中でどういう格好をしているのか気になる。戦闘機っていうことは、中で横になってるのか？　……そう考えるとなんかしまらないな。

つと、俺は動揺しながらも、的にならないよう動き回ってアルトの出方を伺う。

相手の戦闘機へと変形したISは、高速で俺に接近してくる。戦闘機の形状をしてるだけあって、そのスピードはとんでもなく速い。白式が『イグニッション・ブースト瞬時加速』した時に匹敵するほどだ。

「くそっ！」

そしてアルトは距離を詰めながらマシンガンの射撃もしてくる。それを避けきれず何発か当たってしまうが、なんとか横に飛んで射線に入らないようにする。

だが、アルトのISはさらに変形をした。

「まじかよ！？」

戦闘機から腕と脚が展開されて、人型と戦闘機の間形態になった。

そして中間形態になったアルトのISは、すぐに旋回して俺に射線軸を合わせてくる。

アルトが戦闘機状態だったら、射線軸から外れるのは簡単だ。だが、あの中間形態だと小回りが利くようなので、すぐに射線を合わ

されてしまっ。

そして再び放たれる射撃に、固唾を呑んで身構える。

『side一夏 end』

『sideアルト』

「はあ……はあ……」

『VF-25F』の変形に驚いた一夏は、ファイターモードからのガウオークモードによる射撃の的になった。どうやら既存のISには変形というシステムはないようで、初めて相対した一夏には衝撃的だったのかもしれない。

それのおかげで一夏の動きは鈍り、非常に戦いやすい相手となった。

——その一夏は現在、シールドエネルギーを大幅に消耗し、中空で停滞している。

(……あれは、なにかを狙っている……?)

不気味に静止している一夏に危険を感じ、どう動かれてもいいようにガウオークから人型のバトロイドに変形しておく。バトロイドになり、頭部を覆っていた機械が解ける。何故だか知らないけど、ファイター、ガウオークになると全身装甲になるのだ。まあこの謎の点は、このISを渡してきた束しか知らないのだろうが……。

「じゃあ一夏。そろそろケリ、つけさせてもらうぜ!」

ガンポットを一夏に向け、さらにミサイルを発射させる準備もする。一夏が何かしてくる前に中距離射撃で終わらせてみせる。

ズドオオオオンッ!!

しかし、突然とてつもない轟音が響き、俺と一夏は不測の事態に行動を急停止する。

「どういうことだ……何が起きてるっていうんだよ!？」

轟音の正体は、何かがこのアリーナの遮断シールドを破ったから起きたようだ。そして、アリーナ中央に煙がまい上がっている。――おそらく、この煙の中にいる奴がアリーナに乱入してきたのだろう。

「アルト! よく分からないけど、侵入者みたいだ。お前は今の内にピットに戻れ」

「おい、お前はどつするんだよ!？」

「……俺がなんとか時間稼ぎをしてみせる」

「ふざけるな！ お前を置いて、自分だけ逃げれるかよ！」

一夏とオープン・チャンネルで口論をしていると、煙の中から全身装甲のISが二体現れる。

そしてその内の一機は、こちらに大型ライフルの銃口を向けてきた。

「戦闘レベル、ターゲット確認。排除開始」

その正体不明の二機のISにロックをされる。だが、煙が完全に晴れてその全身が露になった所属不明のISは美しく、天使のような翼をつけた機体に目を奪われるのだった。

『sideアルト end』

『sideルルシュ』

「ふむ……。特に監視に引っかけたりしていないな。残る問題はやはり、あの女か……」

現在、自分が宿泊しているホテルに向けて、IS学園のデータベースを閲覧しながら歩いていた。極力、外出をしないようにしているのだが、諸事情により今回は少しだけ街に出ていた。

そして、小型パソコンのディスプレイを眺めながら、IS学園に侵入した際に顔を見られたことについて考える。

まあ、転入してあの女と顔を合わせた時に、何か言われても構わないが……やはり、あまり騒がれたくないのが本音だ。

一人だけだし、ギアスを使って記憶を消してしまおうか、と考えながら歩く。そしてホテルにもう少しで到着といった時に、何か音が聞こえた。その音の聞こえた方向へ振り向く。そこには――

「やあゝルル―シュ。また新しい女のことかい？ 相手も可哀想にねエ」

「――……な、なぜお前が………」

忘れるはずもない、この声。シャーリーやナナリーを巻き込んだ男……、

俺の天敵であり、障害。――もう二度と、会っはすがない相手。

「……………マオっ！」

『sideルル―シュ end』

#### 第四話「クラス対抗戦」(後書き)

更新がまたもや遅くなって申し訳ありません；

そして、色々と考えた結果、ヒロを敵として出すことにしました。それとルルーシュの方にはマオを。

現在リクエストされているキャラについては、また検討させていただきますね。

それでは、感想や意見、アドバイスなどありましたらお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3351s/>

---

IS インフィニット・ストラトス ——別世界から来る者たち——

2011年5月23日22時00分発行